

現代スポーツを考える

— なでしこ JAPAN について —

岡 部 修 一

奈良産業大学地域公共学総合研究所

Essay of the Present-day Sports

— Nadeshiko Japan —

Shuichi Okabe

Research Institute of Public Affairs, Nara Sangyo University

今夏のワールドカップにおいて代表チーム「なでしこジャパン」が優勝する偉業を成し遂げた日本女子サッカー界は、すでに来年のロンドンオリンピックでのメダル獲得という次なる目標に向かっていく。なでしこジャパンを生んだ日本女子サッカー界の歴史と現状についてまとめ、さらにかつて世界一となった歴史をもつバレーボールの現状をあげて、今後の展望について考えてみる。

キーワード：なでしこジャパン、企業スポーツ撤退、バレーボール

1. はじめに

2011年7月ドイツで開催された第6回FIFA女子ワールドカップにおいて、「なでしこジャパン」の愛称をもつ日本代表チームが世界一の座についた。ニュージーランド、メキシコ、イングランドと組んだ予選グループを2勝1敗の2位で突破、決勝トーナメント（ベスト8）に進んだ。

準々決勝ではワールドカップ3連覇を狙っていた地元ドイツを1-0、準決勝はスウェーデンを3-0で圧倒し決勝戦に進出する。決勝の相手アメリカは世界ランキング1位の強豪、過去の対戦成績が0勝21敗3分けと一度も勝ったことのない超難敵であった。

決勝戦では、アメリカに先制を許したが同点に追いつき1-1で延長戦へ。延長後半、勝ち越し点を奪われるも残り4分に再び追いつく驚異的な粘りを見せ、120分間の激闘は2-2のドローに終わる。そしてPK戦を3-1で勝利し、ワールドカップ初制覇の歴史的快挙は成し遂げられた。

FIFA女子ワールドカップは1991年第1回大会が中国で開催され、以後4年に1度ずつ開かれている。第1回から第3回まで3大会の英語表記は「FIFA Women's World Championship」であり、直訳すれば「FIFA女子世界選手権大会」である。しかし当初から一般的には女子ワールドカップと呼ばれており、

岡部 修一 〒636-8503 生駒郡三郷町立野北3-12-1 奈良産業大学地域公共学総合研究所

2003年アメリカ大会以降、正式に「FIFA Women's World Cup」と改称された。

表1は過去のFIFA女子ワールドカップの成績である。前回大会までの優勝はアメリカとドイツが2回ずつ、ノルウェーが1回であり、3位銅メダルまでをみても第3回大会で中国、ブラジルが2位、3位となった以外、メダルはすべてアメリカとヨーロッパ諸国が独占している。

表1 FIFA女子ワールドカップの成績

回数	年	開催国	出場国	優勝	2位	3位	4位
1	1991	中国	12	アメリカ	ノルウェー	スウェーデン	ドイツ
2	1995	スウェーデン	12	ノルウェー	ドイツ	アメリカ	中国
3	1999	アメリカ	16	アメリカ	中国	ブラジル	ノルウェー
4	2003	アメリカ	16	ドイツ	スウェーデン	アメリカ	カナダ
5	2007	中国	16	ドイツ	ブラジル	アメリカ	ノルウェー
6	2011	ドイツ	16	日本	アメリカ	スウェーデン	フランス

表2 FIFA女子ワールドカップにおける日本の成績ならびにアジア予選順位

回数	年	日本の成績	勝 敗	アジア予選での順位
1	1991	予選グループ敗退	0勝3敗	①中国 ②日本 ③チャイニーズタイペイ
2	1995	ベスト8	1勝3敗	①中国 ②日本
3	1999	予選グループ敗退	0勝1分2敗	①中国 ②北朝鮮 ③日本
4	2003	予選グループ敗退	1勝2敗	①北朝鮮 ②韓国 ③日本 (開催国)中国
5	2007	予選グループ敗退	1勝1分1敗	①オーストラリア ②北朝鮮 ③日本 (開催国)中国
6	2011	優 勝	5勝1敗	①オーストラリア ②北朝鮮 ③日本

表2に示すように、日本は第1回大会から6大会連続出場しているが過去5大会ではとくに好成績を残しているわけではない。5大会通算の成績は16試合で2勝3分11敗、総得点13点、総失点40点、予選グループ敗退4回である。すなわち日本はこれまで、本大会には出場するものの予選グループの壁が厚く、決勝トーナメント進出(ベスト8)は難しいレベルのチームであった。それが今回の第6回ワールドカップでは、6試合で4勝1分1敗(PK戦による勝利は公式記録上では引き分け)、総得点12点、総失点6点で初のベスト4から決勝進出を果たし、そして世界の頂点まで駆け上がったのだ。アメリカとヨーロッパを中心に歴史が築かれてきた世界の女子サッカー界にとって、アジア代表日本の大躍進は、まさに驚愕の出来事であろう。

FIFAワールドカップのアジア予選成績をみると、日本は2位、2位、3位、3位、3位、3位という順位で、ほとんどが出場枠ギリギリの出場権獲得である。昨年、中国の広州で開催された2010アジア競技大会において日本は1-0で北朝鮮を破り優勝した。これは日本にとってアジア競技大会、AFC

アジアカップ（AFC 女子選手権大会）における初めての優勝であった。アジア地域の女子サッカーの歴史をみれば、中国と北朝鮮の牙城が強固であり、ほとんどこの両チームで優勝を分けあってきた。またオセアニアサッカー連盟（OFC）に属していた強豪オーストラリアが2006年からAFC所属となり、覇権争いはより厳しくなった。アジアの女子サッカーは激戦区なのである。

2. 日本女子サッカーの歴史

2.1 創成期

このワールドカップ優勝によってなでしこジャパンは日本国内で熱狂的、過熱ともいえるブームを生み、一挙に注目を集める存在となった。マスコミ取材が殺到、強化合宿には多数の観衆がつめかけ、国内試合であるなでしこリーグには、これまでの十数倍という観客が押し寄せている。

ワールドカップで優勝したなでしこジャパンの選手たちは、世界一という至福の喜びにも気を緩めることなく、すぐに次なる目標を見据えていた。9月1日から11日まで中国の済南で開催される2012年ロンドンオリンピック女子サッカーアジア地区予選が目前に迫っていたからである。出場6カ国で総当たりリーグを行い、上位2チームに出場権が与えられる。11日間で5試合を戦う超ハードスケジュールに加え、6カ国の中には先のワールドカップに出場したオーストラリアと北朝鮮も含まれる。ひと月半前に世界一になった日本といえども全く予断は許さず、2位以上となるには極めて厳しい戦いとなるのは必至である。

日本女子サッカー界は、オリンピックへの出場と大会での成績を最重視している。ある意味、今回のワールドカップ優勝より、ロンドンオリンピックの出場権獲得そしてメダル獲得こそを至上命題とし、選手、スタッフ、関係者の誰もがそちらに全精力を傾けようとしている。これはかつて日本女子サッカー界が味わった悲哀と苦難の歴史によるものと考えられる。

日本女子サッカーの歴史は、1970年前後にサッカー愛好家の女性が登場、全国各地でチームが結成され、地域での小規模なリーグが行われたことに始まった。そして1980年、初の全日本女子サッカー選手権大会が開催され、女子サッカー熱も徐々に高まっていった。

1990年、中国北京で開催の第11回アジア競技大会から女子サッカーが正式種目になることを受け、強化を図るために1989年「日本女子サッカーリーグ（JLSL）」が6チームで誕生した。1991年の第3回大会からは10チームに拡大、翌1992年からは下部リーグとして「JLSL チャレンジリーグ」が創設され、入替戦制度が導入された。男子サッカーのJリーグに対し、女子サッカーは「L・リーグ」と名付けることを1994年に発表する。この時期以後、他のスポーツでも「〇リーグ」と名付けることが多くなった。当時はほとんどのチームに専用グラウンドが用意され、クラブハウスを持つチームさえあった。世界から多くの優れた外国人選手が集まり、プロ契約を結ぶ選手も現れるなど、大手企業のバックアップを受けたL・リーグは「世界最高の女子リーグ」といわれるほど隆盛を誇っていた。

1996年アトランタオリンピックから女子サッカーが正式種目となり、日本女子チームは出場を果たす。オリンピック予選は行われず、前年の第2回FIFA女子ワールドカップ（女子世界選手権大会）の

成績で出場権が決まる方式だった。日本はドイツ、ブラジル、スウェーデンとの予選グループを1勝2敗の3位、3グループの3位チームから2チームがワイルドカードで決勝トーナメントへ進出するシステムに拾われて準々決勝に進出、この結果アトランタオリンピックへの出場権を獲得したのだ。日本ではオリンピックは大きな国民的関心事であり、その意味でオリンピック種目に採用され、出場権を得ることができた一連の経緯は、日本女子サッカーにとって絶好の追い風とも思えた。

2.2 リーグ衰退の危機

しかしアトランタ五輪で日本が3戦全敗で予選敗退に終わったことで、情勢が逆転する。大きな関心と注目を集めるオリンピックでの不成績は、日本女子サッカーが世界ではまだまだ実力不足だとの印象を世間に与えた。折悪しく当時はバブル経済崩壊による不況の影響が及んでくる時期、世界で勝てないレベルと評された女子サッカーは、企業にとって格好のリストラ対象となる。

表3および表4に示すように、1998年から1999年にかけて企業チームの休廃部や地域クラブ化が相次いだ。これらのチームはいずれもトップリーグであるL・リーグに在籍経験のあるチームであった。3連覇中だった「日興証券ドリームレディース」、全日本女子サッカー選手権大会優勝経験もある「フ

表3 休廃部した主な女子サッカーチーム

年	チーム名	チームの活動期間
1993	日産FCレディース	1989-1993
1994	浦和レディースFC	1994
1996	新光精工FCクレール	1989-1996
1998	日興証券ドリームレディース	1991-1998
	鈴与清水FCラブリーレディース	1989-1998
	フジタ天台SCマーキュリー	1991-1998
	シロキFCセレーナ	1993-1998
1999	OKI FC Winds	1996-1999
2008	TASAKIペルーレFC	1989-2008

表4 チーム運営から企業が撤退し
市民クラブとなった女子サッカーチーム

年	チーム名	撤退した企業	現在のチーム
1999	プリマハムFC くノ一	プリマハム	伊賀フットボールクラブ くノ一
	宝塚バニーズレディース サッカークラブ (旧 旭国際バニーズ)	旭国際開発	バニーズ京都SC
2000	松下電器LSCバンビーナ	松下電器	スペランツァF.C.高槻

ジタサッカークラブ・マーキュリー」「鈴与清水FCラブリーレディース」の強豪チームはじめ「シロキFCセレーナ」などが次々と廃部やリーグ脱退となる。

翌1999年には「OKI FC Winds」が解散、さらに「伊賀フットボールクラブくノ一」「スペランツァF.C.高槻」「宝塚バニーズレディースサッカークラブ」の企業スポンサーが撤退し、クラブチーム化や市民チーム化という運営上の大きな転換を求められた。2000年シドニーオリンピックの出場権を逃した（1999年第3回FIFA女子ワールドカップの予選グループ敗退）ことで、女子サッカーへの関心は一気に低下する。企業の全面的バックアップを受け発展してきたL・リーグはチーム数減少、チームの財政基盤脆弱化という事態を迎えて衰退化し、消滅の危機に見舞われた。

2.3 リーグ再興

L・リーグのチーム数減少と衰退が顕著となった日本女子サッカーは、リーグ形態の維持に苦慮する。1999年にはチーム数確保のため試験的に大学チームの参入を認め、日本体育大学女子サッカー部が加盟したが、選手の卒業によって継続的なチーム力維持が困難との理由から1シーズンで脱退した。

2000年からはL・リーグとチャレンジリーグのチームを合わせて東西に分けた一次リーグののち、上位下位の決勝リーグを行う方式を導入した。この頃、強化を前提とし世界を見すえた実業団チームや強豪クラブチームと、サッカーを楽しむことを目的とした市民クラブチームとが混在し、大きな実力差による試合レベル低下などの問題が指摘され、トップレベルのリーグとしては難しい状態にあった。

2003年第4回女子ワールドカップや2004年アテネオリンピック出場によって、女子サッカーへの関心が徐々に高まり、少しずつ人気回復が図られるようになる。特にアテネオリンピックで「なでしこジャパン」という愛称のついた日本チームがベスト8の成績に進出したことで、再び女子サッカーへの注目が集まり始め、9月にはL・リーグの通称を「なでしこリーグ」とした。

2004年、なでしこリーグは上位下位各8チームずつの2部制のシステムに移行する。ただし下位のL2リーグの参加チームは、2004年6チーム、2005年7チームであった。

2006年から協賛スポンサーを得て企業名を付けた冠リーグとなり、最初のスポンサーは2年で撤退したものの、2008年からの新スポンサーを受けて「プレナスなでしこリーグ」となっている。

日本女子サッカー界の存亡に多大な影響を与える代表チームなでしこジャパンは、2007年のワールドカップと2008年北京オリンピックの両大会ともに厳しいアジア予選を勝ち抜き出場を果たす。

ワールドカップでは相変わらず予選グループ敗退であったが、北京オリンピックは準決勝（ベスト4）に進出、あと一歩でメダルは逃したものの、オリンピックに国民的関心を寄せる日本でのアピール度は十二分に効果があったといえる。

2.4 なでしこリーグの現状

2010年、なでしこリーグは再編成され、上位の1部リーグに相当する「プレナスなでしこリーグ」が10チーム、下位2部リーグに相当する相当「プレナスチャレンジリーグ」は東西（EAST、

WEST）6チームずつで構成された。

表5 2011年の日本女子サッカーリーグ所属チーム

プレナスなでしこリーグ	リーグ加盟年
INAC 神戸レオネッサ	2005
日テレ・ベレーザ	1989
アルビレックス新潟レディース	2004
岡山湯郷 Belle	2003
ジェフユナイテッド市原・千葉レディース	2000
浦和レッドダイヤモンズレディース	1999
伊賀フットボールクラブくノ一	1989
福岡J・アンクラス	2006
ASエルフィン狭山FC	2002
東京電力女子サッカー部マリーゼ	2000

東京電力女子サッカー部マリーゼは休部

表5および表6は、2011年シーズンなでしこリーグ加盟チームである。Jリーグ傘下のクラブチームから、実業団チーム、市民・地域クラブ、大学や高等学校サッカー部まで、実に多種多彩なカテゴリーのチームが所属している。男子のJリーグは、ほとんどの選手がプロ契約を交わし、いわばプロサッカーリーグである。

しかし、なでしこリーグの選手たちは

表6 2011年の日本女子サッカーリーグ所属チーム

プレナスチャレンジリーグ	リーグ加盟年
EAST	
常盤木学園高校サッカー部	2010
JFA アカデミー福島	2010
日本体育大学女子サッカー部	1999, 2010
スフィーダ世田谷FC	2011
A C長野パルセイロ・レディース	2003
ノルディーア北海道	2010
WEST	
スペランツァ F.C. 高槻	1991
FC高梁吉備国際大学	2011
静岡産業大学磐田ボニータ	2010
パニーズ京都FC	1991
ジュブリーレ 鹿児島	2009
アギラス神戸	2010

ほとんどがアマチュアである。昼間は社会人として協賛や提携するスポンサー企業などで働いたり、派遣やアルバイトなどの契約仕事をこなしている。練習は仕事を終えてから夕方や夜しか行えず、試合や遠征を終えての休みも仕事でままならないケースも少なくない。サッカーに専念できる状況のJリーグとは環境が大きく異なり、仕事と練習の両立は体力的にも精神的にも極めて厳しいと言わざるを得ない。ワールドカップを制覇した、なでしこジャパン（女子日本代表）16人の中でプロ契約を交わしているのは5人である。ただプロ契約といえども、時間的にサッカーに専念でき、サッカー活動で収入を得られる境遇とはいうもの

の、年俵はJリーグ選手やNPBプロ野球選手に比べると、金額的に全く恵まれていないという。

3. なでしこジャパン世界一の価値

3.1 世界に先駆けた戦術

表7は、日本の団体球技の世界大会でのメダル獲得（1位～3位）の実績である。

過去、日本の団体球技で世界一を成し遂げたのは男子でバレーボールと野球、女子ではバレーボールとソフトボール、今回のサッカーなでしこジャパンは4競技目となる。

日本で行われる団体の球技としては他に、バスケットボール、ハンドボール、ラグビー、アメリカンフットボール、水球、ホッケー、アイスホッケーなどあるが、これらの競技はいずれも、同一コートでのコンタクトスポーツ（相手チームと接触しながらプレー）である。コンタクトスポーツでは身長や体重など体格、体型の差が競技力に大きく影響を及ぼすため、外国人に比べ体のサイズの小さい日本人が不利であることは否めず、世界レベルでの上位進出は難しいと言わざるを得ない。

過去に世界一を成し遂げた3競技のうち、バレーボールはネットでコートが分割されておりコンタクトスポーツではない。また野球とソフトボールは同一グラウンドでプレーするものの、守備と攻撃でプレーする人数が違うことや選手同士の交錯はあってもコンタクトスポーツとはいえず、前掲した団体の球技とは明らかに競技形態が異なっている。すなわちバレーボールや野球、ソフトボールでは、俊敏さ、器用さなど日本人の得意要素が活かされたり、技術や戦術などでカバーできる余地があり、そこに日本が勝利できた要因があると考えられる。

表7 団体の球技種目における日本のメダル実績

年度	大会種別	金メダル	銀メダル	銅メダル
1932	オリンピック		男子ホッケー	
1960	世界選手権		女子バレーボール	
1962	世界選手権	女子バレーボール		
1964	オリンピック	女子バレーボール		男子バレーボール
1965	世界選手権			女子ソフトボール
1967	世界選手権	女子バレーボール		
1968	オリンピック		女子バレーボール	サッカー(男子)
			男子バレーボール	
1969	ワールドカップ		男子バレーボール	
1970	世界選手権		女子バレーボール	男子バレーボール
	世界選手権	女子ソフトボール		
1972	オリンピック	男子バレーボール	女子バレーボール	
1973	ワールドカップ		女子バレーボール	
1974	世界選手権	女子バレーボール		男子バレーボール
	世界選手権		女子ソフトボール	
1975	世界選手権		女子バスケットボール	
1976	オリンピック	女子バレーボール		
1977	ワールドカップ	女子バレーボール	男子バレーボール	
1978	世界選手権		女子バレーボール	
1981	ワールドカップ		女子バレーボール	
1984	オリンピック	【野球】*(男子)		女子バレーボール
1988	オリンピック		【野球】*(男子)	
1992	オリンピック			野球(男子)
1996	オリンピック		野球(男子)	
1998	世界選手権			女子ソフトボール
2000	オリンピック		ソフトボール(女子)	
2002	世界選手権		女子ソフトボール	
2004	オリンピック			野球(男子)
				ソフトボール(女子)
2006	世界選手権		女子ソフトボール	
2008	オリンピック	ソフトボール(女子)		
2010	世界選手権			女子バレーボール
	世界選手権		女子ソフトボール	
2011	ワールドカップ	女子サッカー		

【野球】は公開競技

その意味でコンタクトスポーツであるサッカーにおいて、不利な体格差をはねのけて世界一を成し遂げた、なでしこジャパンの勝利は、日本スポーツ史上まさに歴史的な偉業なのである。

2010年10月日本で開催された女子バレーボール世界選手権大会、日本は3位となり銅メダルを獲得した。これはオリンピック、世界選手権、ワールドカップという世界三大タイトルの大会で日本女子チームが26年ぶりに獲得したメダルである。

かつて男女共に金メダルを獲得したバレーボールは、世界の頂点に立つ国民的スポーツとして、球技では野球に次ぐ人気を得ていた。

当時バレーボールは日本のお家芸と言われ、技術や戦術の点で世界最先端を誇っていた。高さやパワー頼みの単純なスタイルが主流のバレーボールに斬新な発想を持ち込み、スピードとタイミングの変化で編み出した「速攻コンビネーションバレー」、また守備においては動きの器用さを活かした「フライングレシーブ」「回転レシーブ」などである。

男子の速攻コンビネーションバレーとは、日本伝統の9人制バレーでの「Aクイック」を基本として、

新たにB、C、Dクイックを考案、それら速攻に絡ませる形での多彩な時間差攻撃、移動攻撃である。ソ連および東欧諸国チームの高いブロックを、速さとタイミングとフェイクモーションで打破するために考案されたもので、速攻コンビネーションバレーを駆使して1972年オリンピックミュンヘン大会で男子が優勝する。一方、女子も1976年オリンピックモントリオール大会において速攻コンビネーションバレーに似た速い攻撃スタイルのバレーで他国を圧倒、金メダルを獲得した。女子は1964年のオリンピック東京大会においても、素早く攻守の切り替えのできる「回転レシーブ」という独特の技術で優

勝しており、オリンピック、世界選手権、ワールドカップ合わせて6回世界一を果している。

世界最先端の技術や戦術という点では、今回のなでしこジャパンのワールドカップ優勝には、パスサッカーと緻密なキック技術があろう。小柄な体格ゆえの俊敏さを活かした、素早いパス廻しは、相手の陣形の間をつくのには有効な戦術であり、また力強く蹴り込む鮮やかなシュートではなく、一瞬のタイミングに合わせてアウトサイドの足先を使ったシュートやループシュートなど、キックの技術レベルと状況判断の高さを示すプレーによって、大柄な外国人選手と互角以上に戦うことができたといえる。

世界に先駆けた戦術ということでは、かつて日本の女子バスケットボールにも世界に通じた独特な戦術によって活躍した時期がある。惜しくも世界一は逃したが1975年の世界選手権大会で銀メダル、1976年オリンピックモントリオール大会では4位、この時期まぎれもなく日本女子バスケットボールチームは世界トップレベルにあった。長身選手を揃えたアメリカやヨーロッパ諸国の高さに対抗すべく、逆に低身長を活かして平面で対抗しようとの斬新な発想で考案したのが「忍者ディフェンス」であり「マッハ攻撃」である。前者は持久力と俊敏さを活かし、豊富な運動量と機動力で守るハーフコートプレスディフェンス、後者は俊敏な動きで素早くリバウンド奪取を図り相手の反則を誘う攻撃であった。この斬新で独特な戦法で世界の強豪と互角に戦った日本チームは「ライジングスター」と呼ばれた。

なでしこジャパン、かつての女子バレーボール、女子バスケットボール「ライジングスター」、これら3チームに共通するのは、日本人の特性を活かした世界最先端の、独創的な戦術、技術を備えていたということである。

3.2 日本バレーボールの衰退

日本のバレーボールが世界で勝てなくなった原因としては、次のような理由が考えられる。

まずひとつめは、世界一となるため日本が考案した、男子の速攻コンビネーションや女子の回転レシーブなど独自の戦術や技術が外国に伝わり世界で標準化されたこと、次に1970年代までの日本対ソ連という2強対決の構図からヨーロッパ、南米諸国を中心とした新たな勢力の台頭を受け、高身長を活かした諸外国の革新的な戦術や戦法（サーブレシーブ2人制、リードブロック、バックアタックの多用）が考案され、その導入や対応に日本が立ち遅れたこと、さらに日本協会の強化策（世代交代）の失敗、そして世界トップレベルの選手の長身化で、バレーボールの競技要素の中で高さの絶対的有利さが飛躍的に高まってしまい、主に身長面で日本の体格的不利が顕著になったこと、などである。

1990年までを日本バレーボールの絶頂期とすれば、その後は苦難の時代であった。バブル崩壊による長期的経済不況、さらに全日本チームの世界レベルでの成績不振により、人気凋落と判断した企業はリストラ策として休廃部を決めた。女子ではユニチカフェニックス、日立ベルフィーユ、東洋紡オーキスといった伝統チームはじめ、ダイエーオレンジアタッカーズ、イトーヨーカドープリオールなど強豪チームも次々と姿を消した。いずれも日本リーグや全日本選手権での優勝経験があり、人気、実力ともに兼ね備えたチームであったが、長引く不況で企業の業績不振が続き、厳しいコストダウンの一環として休廃部に至った。そして最終的には、かつて世界トップレベルの時代を支えた、1969年日本リーグ創設当初の紡績、繊維、家電の大手企業6チームすべて（ユニチカ貝塚、日立武蔵、ヤシカ、東洋紡守口、倉紡倉敷、全鐘紡）が、日本女子バレーボールの舞台から姿を消してしまった。

かつては世界トップレベルの実力を備え「日本のお家芸」としてマスメディアに多く露出し、国民的人気を背景とした時代には、相次ぐ企業チーム参入でリーグ拡大も図ることができた。しかし1990年以降の企業チーム休廃部という厳しい現実、チーム強化を一企業に全面的に依存することへの限界を示したといえる。現在、一企業に頼る形だけではない、新たなチーム強化の方式が模索されている。

3.3 日本女子サッカーの今後

なでしこジャパンがワールドカップで世界一となったとはいえ、将来に向けては日本女子サッカー界には多くの課題があることも事実である。

かつての女子バレー同様、なでしこジャパンが展開するパスサッカーを諸外国が導入すれば、いずれ体格差が大きく影響してくることが予想される。体格差を凌駕する世界最先端の新たな戦術の考案や開発というのは言葉でいうほど簡単にできるものではない。日本に限らず世界に通じる新たな技術や戦術を編み出した国がトップに立ち、やがてそれが標準化されてレベルが向上し、競技の進化につながっていく。今回日本が斬新な戦術によって世界制覇を果たしたことは、パワーサッカー主流の世界女子サッカー界のレベル向上のためには大きな功績であろうが、それゆえいずれ日本が体格差に悩まされる時代が訪れることは想像するに難くない。しかしそれはスポーツの宿命である。

現在なでしこジャパンでの5名の選手がドイツ、フランスでプレーしている。今後海外でプレーする選手を増やすことは、個々の選手のレベルアップにとり極めて有効なことと考えられる。新たな戦術を生み出すことはたやすくなくとも、選手の海外経験は、体格差の中でプレーする技術を磨き、経験値を増し、自主自立の強いメンタリティを獲得することに結びつく。将来的に継続して代表レベルの選手に積極的に海外経験を積ませていくことが必要であろう。

2010年から「なでしこリーグ」は新たな編成となり、Jリーグのクラブ、企業、市民・地域クラブ、大学や高等学校サッカー部など、多様なカテゴリーのチームが加盟している。企業スポーツ撤退の時勢によって大企業に全面的に依存する強化スタイルは崩壊した。今後は強化と普及、育成を兼ね備えたシステムを構築していかなければならない。トップレベルのチーム自らが普及、育成にも関わっていかなければならないのである。

そして女子サッカーより男子の力強さ、スピード感あふれるプレーの迫力に魅力を感じるファンも多いであろうが、女子サッカーの魅力は何かを明確に打ち出して、ファンや世間にアピールしていくことも求められる。今回、なでしこジャパンの選手たちは審判の判定に不満や抗議の態度を一切見せず、スライディングで倒されても大げさに痛がる素振りをせず、すぐ起き上がってプレーに戻る姿勢に非常に感銘を受けた。この点は男子サッカーと明らかに異なっている部分だ。たとえプレーは豪快で迫力があるろうと粗暴な態度や行為、大げさなアピール、審判を騙そうとするかの振る舞いは大変に見苦しく、子どもには見せたくないと思ってしまう。コンタクトスポーツ特有の荒っぽさ、粗暴さが見え隠れする男子とはまったく違う、女子サッカーの魅力を強く発信する必要があるだろう。

ワールドカップ優勝から1カ月半、なでしこジャパンはロンドンオリンピックアジア予選を4勝1分勝ち点13の1位で勝ちぬき、オリンピック出場権を獲得した。大会を終えた選手、スタッフたちの達成感や安堵の表情は、心なしかワールドカップ優勝の時以上のものに思えた。日本女子サッカー界はオ

オリンピックに対し特別の思い入れがある。1990年代後半の発展期ともいえるべき時代、折悪しく重なった不況による企業撤退の動きがオリンピックの不成績と出場権逃しによって加速、リーグが衰退するという辛酸をなめた過去があった。そして2004年以降、女子サッカーに再び注目が集まった理由もまたアテネ出場、北京4位というオリンピックでの好成績によるものだった。すなわち女子サッカー界は、日本で国民的関心が集まるのはオリンピックであり、その出場の可否や活躍こそがスポーツの盛衰に大きく影響するという現実を痛切に感じたのである。

4. まとめ

なでしこジャパンのワールドカップ優勝は、団体球技のコンタクトスポーツで初めて成された歴史的快挙である。女子サッカーの歴史が古く、体格に勝るアメリカやヨーロッパ諸国のチームを撃破しての優勝は、俊敏さや器用さなど日本人の特性を活かした、ち密で速いパスサッカーという世界に通用する独自の戦術を備えていたことによる。また選手やスタッフが頻繁に口にしていた「団結力」は、自分たちのサッカースタイルを貫徹し、試合に勝利するため、それぞれが自己の役割を全うするとの強いメンタリティを表しているものと考えられる。その強い思いは、二十年間に栄枯盛衰を経験した過去が背景となっていると考えられる。

激戦区のアジアで、しかも強行日程にもかかわらず見事に出場権を獲得したが、来年のロンドンオリンピック本大会では、世界一（金メダル獲得）再現への国民的期待は過熱しさらなる重圧となろう。

2000年シドニーの出場権を逃して以降、2004年アテネベスト8、2008年北京4位と着実にステップアップを果たしてきた、なでしこジャパンのロンドンでの現実的目標はメダル獲得（3位以内）のはずだが、ワールドカップ優勝に熱狂した国民は安易に金メダル獲得を求めるに違いない。優勝するかどうかは時の運、重要なことは、世界トップレベルのポジションを継続していくことにある。

今現在、なでしこジャパンと女子サッカーには世間の大きな注目と関心が寄せられているが、世間やマスメディアの大多数は、飽きやすく手のひら返しの風潮があることを忘れてはならない。人気にあぐらをかき、世代交代を怠って低迷した日本バレーボール界の轍を踏まないためにも、将来構想を明確に打ち出していくことが求められよう。

参考文献

- なでしこ世界一への軌跡 2011年9月号. 共同通信社.
- サッカーマガジン 2011年7月26日号. ベースボールマガジン社.
- サッカーマガジン 2011年8月2日号. ベースボールマガジン社.
- Sports Graphic Number 2011年8月18日号. 文藝春秋社.